

文は簡潔であるけれども、その背景に先生の精細な研究の深さがにじみ出ると共に、凡ゆる史料が涉獵せられ、その典據と所在が一々明示せられてゐる。これは後に續くものにどれほど多くの便益を與へるか測り知れないものがある。そして先生はこれらの資料を單なる羅列でなしに、そこに自らなる結論を暗示しながら、獨斷に陥るような結論を下されたことがない。考うべしといふ語が隨處に見られるのも先生の學風の一であるが、それに依て我々は常に問題を與へられる。問のない所に答のあるべきはずはないので、問が出されたといふことは、答が用意され、暗示せられてゐることである。かうした意味で本書は長い眞宗教學史に於ける異義史跡をつける大きな答であると共に問でもある。先生が我々にのこされた問を以て、新しい課題に答へてゆくところにこそよく先生の學恩に報ゆる道があることを思はずにはゐられない。

新刊紹介

王本願論——本論篇——

加藤 佛眼 著

著者は、先に『第十八願の研究』及び『王本願論——序論篇を發表して——』が、それらをうけ、本論として整へられたものが本書である。著者の意圖は序文に窺える如く、近代學的眞宗學の體系的組織という課題に答えようとするものである。即ち純粹宗教としての佛教の宗教的根源である第十八願の深義を佛教學及び淨土教諸宗義等に關する蘊蓄を驅使して、近代的表現により微細な點に互つて詳細に論證せられてゐる。

本書の構成は總論と別論とより成り、前二書の内容を總論として要約し、別論に於て大行論——乃至十念の研究——、大信論——本願三信の研究——、證益論——若生者の研究——を以て王本願論を開展されている。此は尋いで出される典籍篇が待たれることではあるが、最近の眞宗學界として稀にみる好著である。著者の多年の

勞を謝し、宗學に關心をもつ凡ての人に
とつて必携の書であり、敢て江湖の閑談
を薦める。(京都・永田文眞堂刊・A 5
判五七四頁 價 一、三〇〇圓)(日井)

日本曆學史概説

荒木 俊馬 著

戰時中(昭・18・7)山口書店より出版せられたものを、このたび再刊したものの。あらたに補正をくわえ、平易な文章にしている。わが國固有の曆より説きはじめ、中國曆遵用時代の變遷、西洋科學受容による國曆獨立時代より、明治の改曆にいたるまでの経緯を、文化史的觀點にたつて敘述したところに、その特異性がある。(昭和三五・二・一〇、恒星社厚生閣發行、B 六判、二二七頁、定價三〇〇圓)

(鈴木)